

佳作

あげはちゅうじょう たびごでる

茨城県 筑西市立中小学校一年 永盛 舜太

きよねんの十一がつ七かに、おじいちゃんがおむしをみつめました。それは、あげはちゅうじょうのちゅうちゅうでした。

「わあ、くさい。」

おじいちゃんがおむしのあたまをさわったら、きいろいつのがでてきて、そのつのはくさかったです。

そして、むしかごにいれるといつのまにかさなぎになっていて、ずつとごかないでふたのうしろにはりついていました。十二がつになってもそのままだったので、

「どうしたんだろう。びょうきになっちゃったのかな。」

「さむくてこおっちゃったのかな。」
おとうさんたちとはなしていました。

ほんでしらべてみると、あきのさなぎはふゆをこして、はるにちようじになるとかいてありました。「よかった。また、げんきになるんだ。」

ぼくは、ほっとしました。さなぎは、えさをあげるひつようがないので、それからあげはのことはわすれてしまいました。

はるになりました。みんなが、あげはのようちゅうをみて、

「しんじやったのかな。」
っていつていて、しんぱいでした。

そして、ぼくは一ねんせいになりました。でも、あげははそのままです。四がつ二十七にちのちぶつかまえ、おかあさんが、

「ちようじになってる……」
といいました。おどろいてみると、はねのいろが、あか、きいろ、あお、しろ、くろ、のももよう、とてもきれいでした。

それから、ぼくのたんじゅうじゅうびの二十七にちかた

あげはをにがしてあげることにしました。はじめは、むしかごのふたをあけても、とびませんでした。おとうさんがべらんだのてすりのところへおいても、じっとしていました。ぼくがねるときもそのままいたけど、あさみたらいませんでした。にがしたつぎのひから、たまにおなじあげはをみるようになりまして。ぼくがにがしたあげはかなとおもって、じっとみてしまいます。

ふゆのあいだ、ぼくはこたつのなかであたたまっていたのに、さなぎはさむいのに、そとでなにもたべないでいきいてすこかったです。さいごのおわかれのときには、しゃしんをとってあるばむにはりまして。いのちのちからはつよいんだなあとおもいました。そして、あげはのいのちのよさは、ぼくのげんきのもとになっています。

